



モニタリングサイト1000

シギ・チドリ類調査 ニュースレター

2022年度冬期概要版

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査 2022年度冬期調査結果の概要

全国110ヶ所のサイトで実施

2022年度冬期調査は、2022年12月1日から2023年2月28日までの期間に実施されました。全国110ヶ所（暫定値）のサイトで調査を実施し、このうち一斉調査（2023年1月15日を基準日とした前後1週間の調査）には88サイトが参加しました。一斉調査期間では、シギ・チドリ類31種21,707羽のほか、ツクシガモ4,971羽、ヘラサギ37羽、クロツラヘラサギ242羽、ズグロカモメ2,202羽が記録されました。冬期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計は、シギ・チドリ類40種38,667羽のほか、ツクシガモ7,256羽、ヘラサギ73羽、クロツラヘラサギ425羽、ズグロカモメ5,537羽でした。

2年連続で冬期の個体数は減少

1999年度冬期以降の「全サイト」と「継続サイト（調査が継続されているサイト）」のそれぞれの最大個体数の合計を、グラフに示しました（Fig.1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度と比べ2,198羽減少、継続サイトでは前年度と比べ1,655羽減少し（前年度比、全サイトで5.4%減、継続サイトで6.4%減）、全サイト・継続サイトともに、2年連続で減少しました。

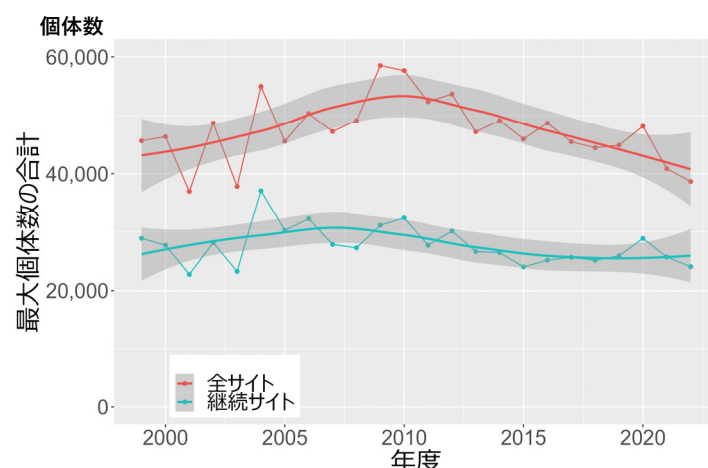


Fig.1 冬期調査における全サイトと継続サイトの最大個体数合計の推移（1999年度から2022年度の継続サイトN=32）

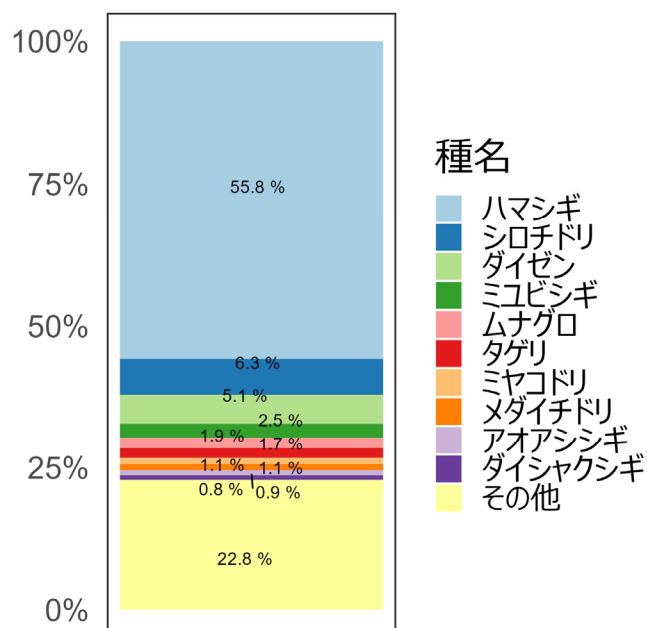


Fig.2 2022年度冬期調査におけるシギ・チドリ類の種構成比

ハマシギ、シロチドリ、ダイゼンの順位は変わらず

2022年度冬期調査におけるシギ・チドリ類の種構成比をみると、個体数上位は、ハマシギ55.8%（26,880羽）、シロチドリ6.3%（3,048羽）、ダイゼン5.1%（2,475羽）でした（Fig.2）。総個体数の過半数を占める1位のハマシギと2位シロチドリ、3位ダイゼンの順位は過去10年間で変化はありませんが（Fig.3）、3種とも前年度より個体数は減少していました（Table1左）。前年度比ではミユビシギとムナグロの順位が入れ替わりました。その他、長期的な順位の傾向として、ミヤコドリ、アオアシシギの上昇傾向や、ダイシャクシギの降下傾向が見られました。

ミヤコドリは減少傾向に

種別最大個体数の前年度比では、ミユビシギの増加数が最も大きく、47%増加していました（Table 1 右）。また、アカアシシギ、コチドリ、チュウシャクシギは10～19%増加していましたが、増加数は20羽以下でした。減少数4位のミヤコドリ（Table 1 左）は個体数が増加傾向にあった越冬種ですが、2018年頃から減少傾向に転じています（Fig.4）。越冬地が局所的で、生息地の環境収容が限界にあるのかもしれませんが、ほかに、九州地域で越冬するクロツラヘラサギの増加傾向が頭打ちになっていました。

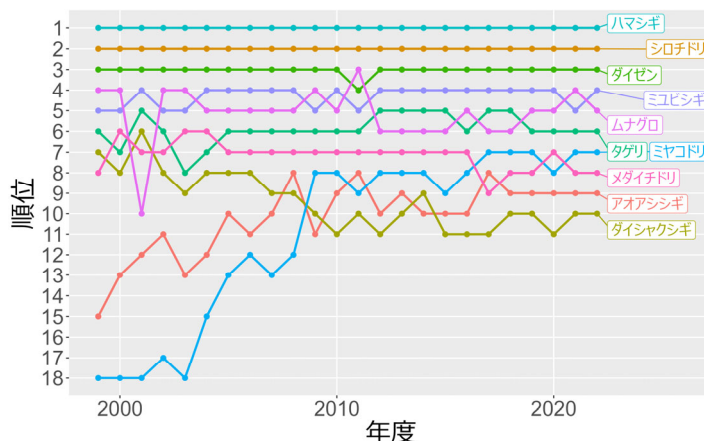


Fig.3. 2022年度冬期調査における最大個体数上位10種の順位の変化（1999年度から2022年度）

Table 1. 2022年度冬期 種別の最大個体数の前年度差 左：減少数上位5種、右：増加数上位5種

2022年度冬期最大個体数 減少数上位 (全サイト)				
種名	2021年度冬	2022年度冬	前年差	前年比
ハマシギ	27,777	26,880	-897	0.97
ムナグロ	1,716	935	-781	0.54
ダイゼン	3,059	2,475	-584	0.81
ミヤコドリ	632	540	-92	0.85
シロチドリ	3,139	3,048	-91	0.97

2022年度冬期最大個体数 増加数上位 (全サイト)				
種名	2021年度冬	2022年度冬	前年差	前年比
ミユビシギ	807	1,189	382	1.47
タゲリ	737	831	94	1.13
アカアシシギ	95	113	18	1.19
コチドリ	81	94	13	1.16
チュウシャクシギ	116	128	12	1.10

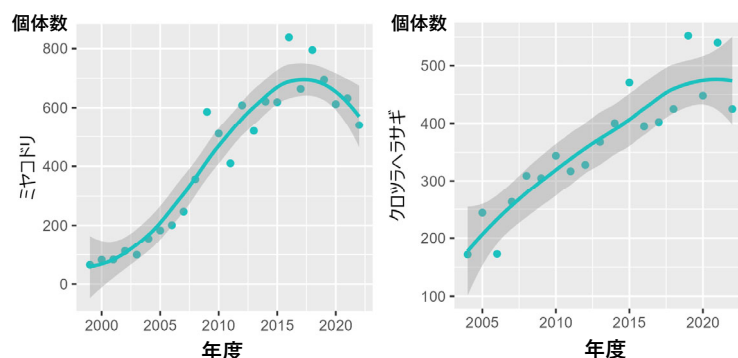


Fig.4. 冬期調査におけるミヤコドリとクロツラヘラサギの最大個体数合計の推移（ミヤコドリは1999年度、クロツラヘラサギは2004年度から2022年度）

Table 2. 2022年度冬期 サイト別の最大個体数の前年度比減少上位5サイト

2022年度冬期 減少数 上位 5 サイト				
サイト	2021年度冬	2022年度冬 ¹	前年差	前年比
泡瀬干潟	2491	1343	-1148	0.54
大授搦	9621	8732	-889	0.91
荒尾海岸	1321	519	-802	0.39
球磨川河口	1689	1327	-362	0.79
加茂川河口	1189	853	-336	0.72

¹ 個体数合計50以上のサイトを対象

沖縄地域のムナグロの動向を注視

最も個体数が多かったサイトは例年と同じく大授搦（佐賀県）で、以下、白川河口（熊本県）、中津干潟（大分県）の順となり、いずれも九州のサイトでした。ただ、2022年度冬期に50羽以上観察されたサイトのうち前年度比で減少数が大きかった上位5サイトも、泡瀬干潟（沖縄県）、大授搦（佐賀県）、荒尾海岸（熊本県）、球磨川河口（熊本県）と九州のサイトが4サイト含まれました（Table 2）。特に、泡瀬干潟の個体数減少には、前年度比でムナグロ795羽の減少が大きく影響していました。ムナグロは沖縄・南西諸島では冬鳥であるため、同地域のムナグロの個体数動向に注意して越冬環境を分析する必要があると考えています。

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真：イカルチドリ(守屋年史)

2022年度 冬期概要

発行元：環境省自然環境局生物多様性センター

編集：特定非営利活動法人 バードリサーチ

編集者 守屋年史

電話/Fax: 042-505-4044

<https://www.biodic.go.jp/moni1000/>

<http://www.bird-research.jp/>

メール: shigichi@bird-research.jp